（様式４）

令和２年度自己評価結果報告書

学校名　湯梨浜町立東郷小学校
校長名　　本田　弘樹　　印

１．学校の教育目標

人間性豊かな心と自ら考え正しく判断できる力を培い、心身ともに健やかでたくましい児童の育成

２．本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画をもとに設定した学校評価の具体的な目標や計画

（１）学ぶ意欲の向上と確かな学力の向上　（２）支え合い高め合う人間関係づくり　（３）健やかな体づくり （４）地域に根ざし開かれた学校づくり　（５）働き方改革の推進

３．評価項目の達成及び取組状況

評価項目	結果	理　　由
（1）学ぶ意欲の向上と確かな学力の向上（学びの力づくり） ・算数科・特別活動を中心とした授業改善の推進	**B** **中間評価 B** **Ｒ１評価 B**	**【成果】** ・全教職員が授業研究を行い、外部から講師を招聘し、継続的な指導助言により授業改善を推進することができた。（算数：鳥取大・矢部教授１回　特別活動：中部教育局・青木指導主事３回） ・学級会活動を本格的に研究することにより、児童が中心となって活動するため、児童の表現する力を育てるとともに、学習指導要領改訂の主眼である「主体的・対話的で深い学び」が各教科・領域への波及が期待できる。 ・特別活動を研究に入れたことで、学級経営の見直しも図ることができるようになった。 ・わかる児童がわからない児童に自然に教える場面が増えてきている。今後は「わからない」と自然に言える授業づくり、学級の雰囲気づくりを目指したい。 ・児童アンケートの次の項目の肯定的評価が昨年度より上昇した。 ④学校の勉強はよくわかる　⑤先生はわかりやすく教えてくれる ⑦学習中、先生や友だちの話をしっかり聞いている ⑧学習中にわからないことをそのままにしないで解決している ・保護者アンケートの次の項目の肯定的評価が昨年度より上昇した。 ⑭学校は、分かりやすく子どもが意欲的に取組む授業や指導に努めている **【課題】** ・コロナ禍のため全国学力・学習状況調査を実施することができなかった。（ＮＲＴ検査結果は未着） ・今後は授業終了時の児童の振り返り・自己評価の実践の積み上げが課題である。児童が自らの課題を発見し、学習に主体性をもたせ、学習の自立化を図る必要がある。（矢部教授） ・来年度から本格的なＧＩＧＡスクール構想、「とっとり学力調査」が本格的に実施される。ＩＣＴ教育の推進と学

		力向上の取組が必要となる。 ・児童アンケートの次の項目の肯定的評価が昨年度より下降した。 ⑪毎日、忘れず宿題をしている　⑫家庭学習を〇年生は〇〇分以上している ・保護者アンケート「⑥お子さんは授業がわかりやすく楽しいと言っている」の肯定的評価が昨年度より下降した。
(2) 支え合い高め合う人間関係づくり（豊かな心づくり） ・自分も友だちも大切にする温かい人間関係にあふれた学級づくり ・児童理解を深め、いじめや不登校が生じないような学校づくり	**B** 中間 A R１ B	**【成果】** ・年度初めに特別支援・生徒指導・教育相談担当の分担を明確にすることにより、特定の教職員に業務が集中することがないよう配慮することができた。 ・児童の小さなトラブルも管理職に報告され、関係者が迅速に集まりチームで対応する体制ができた。初動で対応することで芽を摘むことができたせいか、１１月後半頃から問題行動等がほとんど見られなくなり、現在は校内全体も落ち着いている状況である。 ・特別支援、不登校児童等の関係者会議や支援会議を適宜実施し、職員、保護者で共通理解をするとともに、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーや町教委、福祉機関、医療機関との連携を行うことができた。 ・「くらしのやくそく」を改訂し、「寝る時刻の目安」「電子メディアと付き合うルール」を明記した。 ・児童アンケートの次の項目の肯定的評価が昨年度より上昇した。 ①学校に来るのが楽しい　⑰自分から笑顔であいさつをしている ・保護者アンケートの次の項目の肯定的評価が昨年度より上昇した。 ①お子さんは、早寝・早起き・朝ごはんなど、正しい生活習慣が身についている ⑲学校は、子どものことに関する相談ごとや連絡など、家庭と意思疎通を図っている **【課題】** ・感染防止のため、集団・体験・交流学習等の中止や制限により、人間関係づくりに支障が生じる面が見られた。 ・いじめは今年度８件を認知した（昨年度１２件）。不登校児童が昨年度の３名から２名に減少した（２名とも昨年度から継続）。今年度前半に相談室登校をしていた２名も、２学期は教室で生活できるようになったが、冬になってから欠席が増えてきている。 ・春と秋に２回実施したHyper-QUによる「学級満足度」が学級によって差異が見られた。 ・マスク着用により児童の表情、微妙な心の動きを読み取ることが難しい。 ・生徒指導等の対応が評価の中心となり、児童の心を育む教育にもっと視点をあてる必要を感じる。
(3) 健やかな体づくり ・自分のめあてを持ち、継続して運動に取り	**B**	**【成果】** ・コロナ感染防止を考慮しながら、運動会（半日開催）をはじめ、マラソン記録会、校内水泳大会、なわとび大会等の体育的行事や修学旅行、船上山自然学習等の体験活動を実施することができた。 ・昨年度の学校運営協議会で意見のあった「電子メディアとのつきあい方」について学校保健委員会で検討し、基

組む意欲の向上 ・健康の維持・増進に向けて、自ら考え実践する力の育成 ・新型コロナウイルス対応	中間 A R１ B	準となるルールを検討し、「くらしのやくそく」を改訂することができた。 **【課題】** ・各種大会がほとんど中止となり、練習にがんばっている児童の活躍の場が減少した。 ・計画訪問時に、特に低学年の授業中の姿勢が悪いとの意見があった。 ・コロナの影響で、児童の体力面の低下や食育の停滞を心配する。
（4）地域に根ざし開かれた学校づくり（地域との連携・活動の推進） ・熟議によるコミュニティ・スクールの良さを生かした活動の推進 ・地域に学ぶ教育活動の充実 ・学校からの情報発信の充実	**A** 中間 B R１ A	**【成果】** ・学校運営協議会の会長・副会長を核に、地域に根差し開かれた学校づくりを進めることができた。運営協議会に授業参観を入れ、給食をはさみながら協議の時間を確保することで、学校の取組の理解を深めてもらい、関係者評価の精度を高めていただくとともに、熟議の時間を保障することができた。 ・読み聞かせやミシン、サケの飼育、校外行事の引率等に続き、体育での水泳指導や、低学年の焼き芋教室等、教職員の要望に応えていただいた教育活動が増えてきた。 ・読み聞かせボランティアの方を給食に招待する機会を設けることができた。 ・見守り隊（ルックチルドレン隊）の先進的な取組として文部科学省が調査に来られた。 **【課題】** ・コロナ感染拡大を考慮し、予定していた「ルックチルドレン隊の皆様への感謝の気持ちを伝える会」が中止になったことが残念であった。
(5)働き方改革の推進 ・時間外在校等時間の縮減 ※昨年度の項目と違うため、左欄の最終評価は未記入	**C** 中間 C	**【成果】** ・教職員の空き時間の増加、生活時程の縮減、通知表の１・２学期の所見の廃止、月に１回のノー残業デー、留守番電話の設置やストレスチェック等を実施し、学期末に校内衛生委員会を開催し業務改善の検証を行ってきた。 ・今まで夜間に行っていた学校運営協議会、学校保健委員会を昼間に開催したり、水曜日は夜のＰＴＡ部会等を入れないなどの対応を行った。 **【課題】** ・「教育職員の給与等に関する特別措置法」の改正に伴い、1 か月の時間外業務時間が 45 時間、1 年間で 360 時間を超えないよう上記の取組をしてきたが、12 月末時点ですでに 25%の職員が 360 時間を超えてしまった。

４．学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

結　果	理　　由
B 中間 B Ｒ１ A	・保護者アンケートより、本年度の東郷小学校教育について一定の評価をいただいていると捉えている。 ・(1) については、特別活動も研究に加えたことで、学習指導と学級経営の両面から研究を推進する体制ができつつあるが、来年度から本格的に始まるＧＩＧＡスクール構想や、「とっとり学力調査」に伴う学力向上が来年度の大きな課題となる。 ・(2) については、生徒指導体制や支援会議等の取組については体制が整いつつあるが、児童の心を育む評価の視点が薄いように思われる。 ・(3)については、電子メディアとのつきあい方に関する基準が出来上がったので、今後は普及と実践化が必要である。 ・今後もコロナウイルス感染症の状況を鑑みながら、児童の健康・安全と、学ぶ機会の保障との兼ね合いを考慮した丁寧な学校運営が求められる。児童の健康・安全面と、コロナに負けない体力の向上という評価の視点も必要に思われる。 ・(4)については、無理のない範囲でボランティアの裾野を広げるとともに、教職員がお願いする内容の発想の柔軟化を図りたい。 ・(5)については残念な結果となったが、無駄に時間を過ごしている教職員は皆無である。何よりも体調不良や長期休暇の職員がなかったことや、中途退職や産育休に入った職員の代員がスムーズに配置されたことが有難かった。超過勤務は教材研究に一生懸命な若手教員が主であるため、若手教員の力量を育てるとともに、授業準備や学級経営に専念できるバックアップ体制を構築しなければならない。

◎「３・４」の評価結果の表示方法　　A…十分達成されている　B…達成されている　C…取り組まれているが、成果が十分でない　D…取組が不十分である

５．今後取り組むべき課題

課　　題	具体的な取組方法
（１）学ぶ意欲の向上と確かな学力の向上	・研究推進を「特別活動」に絞るとともに、ＩＣＴ教育、学力向上も視点に取り入れる。 ・若手教員の育成も検討する。（来年度から初任研はメンター方式になる可能性あり）
（２）支え合い高め合う人間関係づくり	・特別支援教育、道徳教育、人権教育、ふるさと教育、体験活動等の取組も学校運営協議会で紹介する。
（３）健やかな体づくり	・保護者アンケート「③お子さんは、テレビやゲームの時間を決め、それを守っている」の肯定的評価が上がるための取組を行う。 →必然的に児童アンケート「⑪宿題をしている」「⑫家庭学習をしている」も上がることが期待できる。 ・児童の安全・健康、体力面の取組も学校運営協議会で紹介する。
（４）地域に根ざし開かれた学校づくり	・ルックチルドレン隊等の裾野の拡大をめざす。（チラシ、町報等によるＰＲ活動） ・今後も教職員のニーズを募り、学校支援ボランティアにお願いしながらふるさと教育の充実をめざす。
（５）働き方改革の推進	・若手教員の育成に多くの職員が関わる体制を検討する。 ・特定の職員に業務が集中することのないように、校務分掌等のスリム化を含めた見直しを図る。 ・文部科学省は高学年の教科担任制の導入を取り入れようとしている。本校でも実施可能か検討したい。